田検小学校
ヒストリア　～歴史秘話～
第１３号　　（26.3.13）

「１２号のつづきを早く読みたい」という声があったので，急いで書きました。

忍術師「護得久主」話のつづきです。

１　「ぐゆくしゅ」の不思議な力

ある時，女性たちが，田検の畑でとれた「からいも」をティル（竹で編んだ背負いかご）に入れ，それを背負って家に帰る途中，道ばたでぐゆくしゅに会った。女性たちが，ぐゆくしゅにていねいにあいさつをすると，どうしたことか，ティルの中に入っていた「からいも」がぜんぶ，すずめに化けてティルから飛んで行ってしまった。

女性たちは，びっくりして声も出せず，そのまま家に帰り着いた。すると，なんとティルに入っていたはずの「からいも」が不思議なことに，ぜんぶ家に届けられていた。女性たちは，ただただ顔を見合わせておどろくばかりであった。

２　「ぐゆくしゅ」，海をわたり薩摩藩の殿屋敷へ

中年（40～50才の頃）になったぐゆくしゅは，娘のチョウエを連れて田検集落に移り住んだ（引っ越し）。ぐゆくしゅは，自分（忍術）の跡継ぎとして芦検の福討義志（ふくうちよしじ）を迎え，田検小学校の校舎裏にあった池の近くに家を構えた。

ある時，宇検集落見里の碇家に，薩摩藩（鹿児島）から呼出しあった。「これは，ただごとではない」と心配した碇家では，さっそく，ぐゆくしゅに頼んで何人かのお伴と船を準備してもらい，すぐに出発することとなった。

碇家の者とそのお伴となったぐゆくしゅ一行は，船で田検を出て何日かしてから鹿児島に着いた。薩摩藩の殿様は，わざわざ鹿児島の海岸まで大勢の出迎えを向かわせ，はるばる奄美大島の田検から船で上鹿（鹿児島に行くこと）した碇家とぐゆくしゅ一行を大歓迎した。

準備万端ととのえた殿の屋敷（お城）では，遠くからやって来た碇家とお伴のぐゆくしゅたちを交えて盛大な酒盛りが始まった。次から次へと運ばれるご馳走の数々。ぐゆくしゅは，まず吸物を手に取った。おいしそうな吸物を一口吸ってみたその時，ぐゆくしゅは，「ハッ」とした。なんと，縫い針が入っていたのだ。「これは針だな･･･」とすぐに感づいたぐゆくしゅは，口の中に入った針を座敷の正面のふすまに向かって「フッ」と吹き出した。針は，勢いよくふすまに突き刺さった。

策（作戦のこと）に失敗した殿屋敷の者たちは，ぐゆくしゅたちを外に逃がさないように，急いで部屋の出入り口の戸を固く閉め切り，明かりを消して真っ暗にした。しかし，ぐゆくしゅは，戸のわずかな隙間から外に抜け出し，仲間を連れ出すことができた。策にはまることなく，碇家とそのお伴たちは，みな助かった。

しばらくしてぐゆくしゅたちは，閉め切られて真っ暗になっていた部屋を外から覗いてみた。すると，中には殿屋敷の者どもが，暗い中で仲間討ち（仲間同士で戦った）したとみえて，折り重なって倒れていた。これを見届けたぐゆくしゅは，碇家の者たちを引き連れて足早に船着き場へ向かい，待機していた船子（船を漕ぐ人）たちと一緒に，夜明け前までに海岸一帯に藁人形を立ち並ばせた後，船を沖に出した。

殿屋敷の者どもが海岸まで追いかけてきた時には，ぐゆくしゅたちの船は，すでに海岸より遠く離れており，もうどうすることもできなかった。その様子を沖の船から見ていたぐゆくしゅたちは，「大島のぐゆくしゅは勝ったぞ。勝ったぞ。勝ち戦だ。とった，とった，とったあ～。」と大声で叫び，かけ声も勇ましく大島へ向けて船を漕いだ。そして，何日かして，みな無事に田検に着いたという話である。

昭和 50 年 11 月に，「渡　武彦さん」が書かれた『親がなしぬしま』という本の中から書き抜いてみました。

どうでしたか，「ぐゆくしゅ」の話は？　読んだ感想を聞かせてほしいです。メモ用紙にでも書いてくれるとうれしいです。待ってますよ！

（文責：福田裕生）